



2022年（令和4年）
6月号（No. 925）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

カナダでの実践をヒマラヤで活かし カンチュンナップ北西壁を初登攀

東海支部 谷剛士

クレーン・ヒマールに横たわるゴジューンバ氷河の東方に位置するカンチュンナップの北面は近年注目され、各国の登山隊が挑んできた。その難壁に今春、カナダ在住のふたりの日本人クライマーがトライ、北壁の中央ラインではないが、北西壁に初めてその足跡を印した。帰国直後に寄せられた最新のレポート。

延々と続くナイフリッジを越えていくと、前方に丸い平らなアイスキヤップが見えた。その奥にはジェットストリームで雪が飛ばされ、真っ黒な南西壁を擁するエベレストが見える。白いアイスキヤップとのコントラストが綺麗で、もはやそのアイスキヤップが頂上かなど、あまり重要ではない気がしていた。

ロープを外し、ふたりで握手を

カナダの延長線上にヒマラヤが

カンチュンナップ（6090m）

——別名「アビ」と言われるこの山を知ったのは、友人との会話からだったと思う。エベレスト街道トレッキングの一部であるゴーキョ

目次

カナダでの実践をヒマラヤで活かし カンチュンナップ北西壁を初登攀 … 1	1
支部長が代わりました …… 4	4
追悼 芳野越夫先輩を偲んで …… 6	6
遠藤さんの思い出 …… 7	7
静岡支部が管理する文珠山荘のこと …… 8	8
連載■ご当地アルプス登山案内	
⑪日連アルプス …… 9	9
⑫相州アルプス …… 10	10
東西南北 …… 12	12
図書紹介 …… 13	13
新入会員 …… 15	15
図書受入報告 …… 15	15
会務報告 …… 16	16
ルーム日誌 …… 17	17
会員異動 …… 17	17
INFORMATION …… 18	18
編集後記 …… 19	19

▶日本山岳会事務局（含図書室）取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時

の東側数kmの地点にあり、チョラパス（5420m）という有名なトレッキング・ルートのすぐ北西側にある、比較的小さな山だ。ただ北側からのその山容は切り立っており、過去何回か各国クライマーのトライを退け、いまだに登られていないという魅力的な山でもあった。

僕たちふたり、谷剛士40歳、バ

ンフ在住」と山田利行

（36歳、カルガリー在住）は、それぞれ別の

経緯でカナダに約10年

近く暮らしている。自

分たちで選んだことと

はいえ、言葉も文化も

違う海外になんの後ろ

盾もなく暮らすという



取付点から見たカンチュンナップ北西壁

もお金も浪費することになり、日本ですでていたような登山は、基本的にできなかつた。
また、カナダ国民ではない僕たちは、外国人として権利も限られた。たとえば、就労ビザを手に入れるためには、税金をしっかりと納めるフルタイムの仕事に就かなければならない。また、国境を越え

るのが、不法就労などを疑う検査があつて困難なため、アラスカやアメリカなど近いのだがなかなか行けないなど、多数。その限られた条件の中で辛うじて登山のモチベーションを保ち、空いた時間を自分たちのクライミングに充てるということを細々続けてきた。

もう7年以上前から、パートナーの山田が「ヒマラヤに行かないか」と話を持ち掛けてくれてはいたのだが、前記の理由と国際山岳ガイドになるための試験で忙しかつた僕は、何回も断つてしまつて

いた。だが、ようやくふたりとも永住権（ほぼ国民と同じ待遇。唯一選挙権のみがない）が取れたタ イミングで、この話が現実味を帯びてきた。また、ガイド試験もコロナ禍中に終わらせることができた。時間が取れるようになった点が大きかったと思う。

今回のヒマラヤ登山に当たつて、僕はいくつかの条件をパートナーの山田と取り決めていた。まず、今まで自分たちが過去に経験した6000m台の山であること、難度は高くとも、オーバーヘッド（上部

雪田や雪庇があり、常に雪崩の危険にさらされることなど）が最小限であること、そして、自分たちがカナディアン・ロッキーで実践してきた氷と雪の登山の延長であること。この3点を中心に目標を選定した。

当初、僕たちが予定していた北壁をダイレクトにつなぐ氷のラインは、まさにこの3つに当てはまつており、万が一氷のコンディションが悪かった場合、向かつて右側の比較的緩い（傾斜が緩いイコール簡単だが、雪がたまり、雪崩の危険にさらされる率が高くなる傾向がある）ラインをプランB（バックアップ）として考えていた。

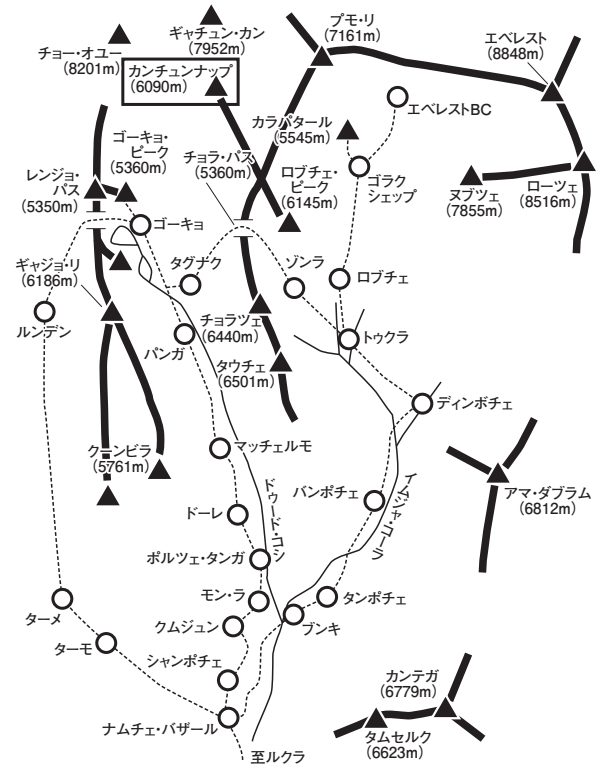
ゴークヨから一気にアタック

4月4日にカトマンズに到着し、数日間ですぐや装備品を整えルクラへ飛ぶ。ポーター2名を雇い、トレッキングを開始する。ゴークヨまでの道のりは、高度順化や今後の登りたい山を探すという意味で、ナムチェ・バザールからターメ經由レンジョ・パス（5360m）を越え、4月12日、ゴークヨ（4750m）に入った。

当初の予定では、2019年に

イギリス隊が行なったように、ゴジュンバ氷河を東側に横断した北壁の基部にベースキャンプを設定する予定だったのだが、地球温暖化のため氷河の横断が極めて危険でポーターが渡ることができず、ロジスティクスを変更せざる得なくなつた。

また、狙っていたラインの氷が下部でつながつておらず、向かつて右側のラインを登ることになった。ただ、氷が少ないイコール今年の春は暖かく雪も少ない。つまり雪崩の心配があまりない状態と判断できた。





核心部となったミックス壁をフォローする

それだけに、良いコンディションに出会ったときの喜びはまた格別だ。正直言うと言語、カナディアン・ロックで行なっているクライミングの方が寒く、辛いことが多いので、もはやヒマラヤの高所でこんなに良いアイス

良好な氷と高度を楽しむ
4月21日、ゴークヨを出発する。ボロボロのモレーンと氷河の横断を終え、早めにテントに入る。翌日も1日で登り切れることはないと思われるのと、困難な箇所は少ない予定なので、体力温存のため明るくなってから出ようと決めた。

4月22日9時、取付(5150m)を出発。1ピッチのアイスクラ
イミングを経て、最大50度ほどの雪壁を5500mあたりまで登る。天気はイマイチだが、4つの天気予報サイトと今まで2週間の実際の天気を見比べ、自分たちなりの天気予報を構築してきたので問題はないと続行を決断、午後3時ごろにはビバークを決める。
4月23日、朝4時起床。登り始める。天気も良い。すぐにテクニカルなクライミングが始まるが、幸運なこと一筋の水が僕らを導いてくれている。もしこれがなければ、プロテクションの乏しい、かなり困難なクライミングになったことだろう。これがロッククライミングとの大きな差だ。雪と氷は変化が激しく、同じ状態に当たることは、こういう大きな山ではまずない。

私が高山の登山で得たものは、技術的に難しいものを登り切る力というよりは、難度は高いが、危険度が比較的小さいオブジェクト(山や壁)を目標に定める大切さ。そして、そこに行くまでの行程や計画など、必ずと言っ

を登っていることが嬉しくなり、喜びながら高度を稼いでいく。もちろん、高度の影響からふくらはぎが攣りそうになったり、ゆっくりしか進めないピッチもあったが、それでも景色がすばらしく、振り返っては登り続けるという動作を繰り返していく。ビバーク地から11ピッチで北壁の肩に出た。反対側の山々が見える。そこから3ピッチ、ボロボロのヘッドウォールを越え、思ったよりも長い雪稜と氷河を越えたと頂上が待っていた。



頂上間近を行く山田隊員。背後はチョー・オユー(右奥)

下降は多少の誤差はあったものの、懸垂下降を交えて反対側のコルに下降。夜10時、氷河上で寒く眠れない一夜を過ごし、翌朝、偵察していた南面を降り、2時間ほどで安全圏に降り立った。
最後にありますが、今回の登山はコロナ禍でなかなか海外登山を行なうのが厳しい状況のなか、日本山岳会東海支部の諸先輩方の応援、また、日本山岳会関係の方々のご支援があり実施することができました。僕自身は山岳会の新参者ですが、このような機会を与えていただき、また、幸運にもコンディションに恵まれ登り切ることができ、本当に感謝しております。ありがとうございます。
この登山は日本山岳会海外登山助成金を受けて実施されました。

*

支部長が代わりました

秋田支部 佐藤和志さん

私は秋田県仙北市に位置し、近くに田沢湖があり、秋田駒ヶ岳や乳頭山の麓に湧く乳頭温泉郷七湯の一軒、鶴の湯の湯主をしております。地元の南八幡平山岳会の会員でもあり、山男としては良い所に住んでいると思います。多くの山の先輩や山の仲間、高校山岳部の先生方にお世話になり今がありますので、山の先輩や山の仲間と恥じないように頑張りたいと思います。



秋田支部長 佐藤和志さん

日本山岳会と言えば、今は亡き今西錦司元会長が二度泊まれたことがありました。そばでお話を聞いておりましたところ、大学山岳部時代に山野草をいろいろ食べて体調を崩したという話をされて、「コバイケイソウは大変だった」と笑いながら語られました。会長さ

んでもそんな経験をされておられるんだ、とびっくりしたことを思い出します。

また、佐々保雄元会長も東北地区合同の支部懇談会においてになられ、青函トンネルや世界のトンネル工事のお話を聞きましたが、今、そのトンネルが開通していることを考えると、すごいお話だったと思います。二度目は奥様とおいでになり、乳頭温泉郷をご案内して喜んでいただいたことを思い出します。

当温泉を含む「日本秘湯を守る会」で「山の日」の署名運動を行なったことがあり、第1回「山の日」記念全国大会で上高地に、私は副会長でしたが会長の代理で出席させていただきました。感激したこともありました。

そのほか、地元山岳会の20周年記念登山で台湾・玉山がありました。台湾山岳協会の招待状が必要と言われ、日本山岳会に入会させていただき、事なきを得ました。

今、昔起こした骨折事故の古傷の痛みで山行はなかなかできませんが、気持ちは山男で過ごしておりますので、以後よろしくお願いいたします。

福島支部 渡部展雄さん

福島県南会津郡の水飲み百姓の三男坊として高校3年まで過ごすこの間、山は私にとって生活そのものであり、常に身の周りは山であつた。俗に「猫の手」と言われた農家の幼き働き手として山野を駆け巡っていた昭和41(1966)年4月、高校卒業と同時に「でもしか」よろしく18歳で福島県警察官となる。採用後「お前らは第2次安保闘争の捨て石だ」と言われた自身の立ち位置を受容しながら、暇を見付けては独り山歩きを始め、これが今日の原点となつた。

警察官生活42年間の中で最も印象的な想い出は、富山県警察山岳警備隊の方々との出会いである。谷口凱夫隊長以下隊員たちの山岳救助に取り組む姿は、私の人生を大きく変えたと言っても過言ではない。



福島支部長 渡部展雄さん

福島支部は、昭和22(1947)年に全国5番目の支部としてスタート、今年創立75年を迎える。現会員数は53名、支部友会員17名を加え計70名体制で2022年度をスタートした。現状は、会員の高齢化と減少傾向が続き、存亡の危機である。特に若手会員の拡大は急務と言える。会員を年齢別に見ると、60歳以上が87%、60歳未満の会員(支部友会員含む)はわずかに一桁である。このまま後数年続けば、クラブの体裁をなくすことになる。

この閉塞状況から脱するには、若手会員の獲得と支部の活性化以外にない。分かり切っていることだが、どこにターゲットを絞って会員を増やし、どのような活動を計画・実行するか。その明確な展望は持ち合わせないままに支部長を引き受けた。無責任と思われるが、一縷の望みは、コロナ禍にあつてもなお山に登る若い人は多いということ。

支部の大先輩をはじめほかの山岳団体、そして、JACの全国支部や本部の指導を仰ぎながら、支部の拡大と発展に努めていく覚悟である。

支部長が代わりました

信濃支部 東 英樹さん

松本生まれ、松本育ち。小さいころ、松本駅で大きなキスリングのかたわらに寝転んでいる若人をみて憧憬。理科大に入学し、散々迷ったあげく山岳部入部。オールラウンドの山登りを、学業はさておき学ぶ。JAC学生部の皇居マラソンでは個人1位になり、高橋のダブルの登山靴をいただいたこと、早大の大谷映芳さんと1・2位を競ったことは忘れがたい。

JACへは社会人になってから、先輩小原俊さん、山崎安治さんの紹介で入会させていただく。1978年には日本ヒマラヤ協会隊（沖允人隊長）でインド・ヒマラヤのヌン峰に登頂、81年の長野県山岳協会隊でカラコルムのガッシャーブルムI峰に登頂。いずれも万事に恵まれた山行だった。



信濃支部長 東 英樹さん

この20年余りは信濃支部の山行委員として活動。2013年から支部山行計画に海外登山も組み入れる。この2年、コロナ禍で動けず、老い先短いのに残念至極。この4月の支部総会で支部長の指名を受け、5月11日、本部理事会で承認され、その任に就いている。

信濃支部は1947（昭和22）年、5番目に誕生した支部で、また、その支部設立の年に、ウェストン・レリーフが復旧されたのがウェストン祭の嚆矢である。それ以来、一度も中断することなく続けられている。73年5月、アンナプルナー峰遠征で雪崩により4人を失う。その混乱と失意、悲しみの中でも、一昨年、昨年のコロナ禍でも、ウェストン祭を継承してきた。

昨年から、登山講習会の位置付けで支部山行と連携した松本市山岳フォーラムの募集登山「日本山岳会と行く山」を行なっているが、これを拡充、継続していこうと思う。ともに楽しく登る中でon the climb trainingができたらいいな、と。使命はYOUTH、会員の拡大である。老いも若きも加入促進が必要不可欠。山岳会、支部存続のために。

熊本支部 土井 理さん

本年4月17日の日本山岳会熊本

支部総会で、支部長にご推挙いただきました土井理です。熊本市内で循環器内科の診療所を行なっており、熊本の登山用品店の医療アドバイザー等々もさせていただいております。熊本や九州の近隣の山には登ったり走ったり、トレイル・ランニングの大会などにもときどき出沒しています。

学生時代に日本の北アルプス、南アルプスあたりを独りでうろろしていました。好きな山は熊本の阿蘇五岳、祖母山系、九重山系、冬の八ヶ岳、北アルプス・剣岳周辺の岩稜帯等々です。新型コロナウイルス感染も相まって時間がつかれず、最近、山行できていないのが大変残念でなりません。

工藤文昭・元支部長、松本莞爾・元支部長、中林暉幸・前支部長の



熊本支部長 土井 理さん

後を継ぎ、諸先輩方を差し置いての熊本支部長への就任に、大変戸惑っているところです。

最近、登山者人口は増加していますが、山岳会に所属している方の数は減少の一途です。山岳会所属のメリットを見出せないためであるかと推察します。関係ははつきりしませんが、山岳遭難は増加傾向です。山岳会は山の知識や登山技術を会得し、難易度の高い登山や登攀ができるようになり、さらに難易度の高い登攀を目指し実行。このために存在していたように思います。遭難防止には知識と技術、そして体力が必要です。

知識や技術を欲してインターネッツを検索・閲覧している方が多くいるであろうことは想像できますが、習得には反復実践が最も重要と考えます。知識と技術と体力は裏切りません。しかし、使わない知識は忘却してしまいます。高みを目指し、安全な登山を心がけ、知識や技術を広め、山岳会のメリットを大きくし、可能であれば仲間を増やし、日ごろからリスク管理のできた登山を行ないたいと考えています。引き続き熊本支部をよろしくお願い申し上げます。

追

OBITUARY

悼



芳野超夫先輩を偲んで

福岡孝昭

先日、科学委員会委員であり、私の母校、学習院山岳部の先輩である芳野超夫氏が亡くなられたという報せを受け、びっくりしました。年明けごろ、コロナのお陰で外出や歩行訓練ができなく、歩けなくて困っているとの連絡を受けていたのですが、まさか亡くなるとは思ってもいませんでした。

歩行が思わしくなくなったのは、役員をされていた米国電気電子学会(IEEE)総会の帰り、機内の



芳野超夫(よしの・たけお)

会員番号4428 永年会員

1929年5月1日 東京都生まれ
 1950年 学習院旧制高等科卒業。山桜会(学習院山岳部OB会)会員
 1953年 電気通信大学卒業
 1956年 日本山岳会に入会、理事(68年、70年)、学生部、科学委員会等の委員を歴任
 1958~60年 第3次日本南極地域観測隊越冬隊員。タロ・ジロ発見
 1975~77年 第17次日本南極地域観測隊隊長、越冬隊長
 2009年 瑞宝中綬章受賞
 IEEE(米国電気電子学会)からは最優秀論文賞等多くを受賞、役員歴任
 2022年3月31日 逝去、享年92

棚に重いスツケースを上げるときに(腰・脊椎)を痛められたことにより、杖をついての歩行になり、リハビリに努めておられました。おしどり会員である奥様のお話では、歩行がさらに厳しくなったのは、「急性硬膜下血腫」に罹っていたためであることが原因で、血腫の血を抜くことに成功したので、歩行訓練を始めたばかりで帰らぬ人になられてしまったとのこと。奥様との山歩きもかありませんでした。先輩には私が科学委員になったことを喜んでいただき、委員長就任に当たっては、強力なご推薦を

いただきました。委員会活動には積極的に参加され、毎月の例会へは杖を突いて、奥様の運転する車で出席され、帰りはタクシードで帰られて、例会への出席を楽しまれました。さぞや悔しかったことと思います。また、我々は寂しい限りです。ご冥福をお祈りいたします。

先輩は第3次マナスル登山隊員候補になられ、このときに先輩は尾根の陰の部分に届いている微弱な電波を増幅する(強める)回路を組み込むとともに、ミニ真空管を使うことにより、それまでの巨大・大重量の無線機によらない携帯無線機を開発。いち早く登頂報告をBCに伝えられたばかりでなく、高山病に罹った隊員を早急に降ろすことができ、命を救うこともできたのです。この小型携帯無線機の開発は、現在の我々の生活に役立っているスマホ(携帯電話)に繋がっています。

第3次マナスル隊参加と同時に第3次南極地域観測隊員候補になり、マナスルでの無線機の使用を村木潤次郎隊員に預けて南極観測隊に加わり、ここでも画期的な発見を行なっています。

それまで電波は光の一種であるので、固体物質に対しては反射するものと考えられていました。ところが、固体である氷については電波が通過することを発見しました。この発見により、南極氷床の厚みが解かり、水中に存在する火山灰層や隕石(これらは私の現役時代の研究試料)の検出ができることになりました。すなわち、この発見はアイスレーダーとしての大きな役目に発展します。米国隊のマクマード基地の氷上滑走路での、計器着陸による航空機の激突原因も説明されました。

先輩の山関係の業績を追加すれば、山での雷対策です。1967年、西穂高岳での松本深志高校の集団登山における雷事故の原因は、導電体である人間が雨に濡れて連なって歩いたことにより、人を貫いて電気が流れたために起こったことを説明しました。これらの研究は、科学委員会の存在意義にも寄与しています。

これらの山と南極に関連した大業績について、本会から秩父宮記念山岳賞を授与していただけたことは、極めて残念です。

(科学委員会委員)

遠藤やんの思い出

小宮山 稔



遠藤靖彦(えんどう・やすひこ)

会員番号6653

1943年 甲府生まれ。甲府第一高等学校から横浜国立大学に入学。ともに山岳部で活躍する。1969年 日本山岳会入会。紹介者は今澤寛、三井松男支部長。1990~2000年 日本山岳会山梨支部事務局。1994~2001年 鶴城山岳会会長就任。2003~08年 山梨県山岳連盟副会長就任。2014~16年 日本山岳会山梨支部長就任。2022年4月17日 逝去、享年79

元山梨支部長遠藤靖彦さんは、本年4月、入院先の山梨県立中央病院で薬石効なく79歳をもって逝去されました。昨年2月、咳や声のかすれなど体調に異変を感じて病院を受診した結果、食道がんと診断され、余命9ヶ月と告げられたそうです。酒・たばこを断ち治療に専念していましたが、4月17日、帰らぬ人となりました。支部運営に多大の功績を残した遠藤さん逝去の知らせを受け、支部員一同、深い悲しみに包まれました。

業を継ぐこととなりました。学業から事業へと、慣れない仕事で大変苦労なされたようですが、遠藤さんの人柄で多くの方に助けられたとのことでした。

仕事の合間には、甲府一高山岳部OB会の鶴城山岳会で活躍され、ご自身の山行や後輩の高校生の指導にも当たられました。69年には日本山岳会に入会されました。73年から89年ごろにかけて、支部活動が停滞し組織の体をなしていない時期で、その立て直し役として遠藤さんに白羽の矢が立ち、事務局として岩間弘雄、坂本桂両先輩とともに支部再建に取り組みしました。その成果が93年の瑞牆山での全国支部懇談会の成功に結び付いたことは、誰もが認めるところです。当時は、支部員でもない私にも遠藤さんから「お前も手伝ってよ」とのお声が掛かりました。

私と遠藤さんとの出会いは、私が大学を卒業して甲府に戻り、南嶺会に入会したところになります。当時の県山岳連盟は会の垣根を越えて活動することも多く、私が一

高の卒業生だったということもあり、5月の連休に赤沢岳西稜に行かないか、と誘われました。それが遠藤さんとの最初の山行かと思えます。黒四ダムから急峻な尾根に取り付き、沢を落ちる雪崩の轟音以上に驚かされたのは、遠藤さんの所(いびき)でした。しかし、テント生活では遠藤さんとの会話はとても面白く、楽しい山行でした。私が日本山岳会入会後もあちこちの山に同行しましたが、なかでもミツクチ沢では遠藤さんのビレーで転落を免れ、命拾いをした苦い思い出があります。

2014年、遠藤さんは支部長に就任しました。以前から山梨には「山梨100名山」以外にもすばらしい山々があり、支部創立65周年記念事業に「山梨200名山」として紹介したいとの思いから、そのたたき台となる山々について各種資料や文献から200を超え、山々の資料を独自に作成し、支部全体の事業として対象の山々の選

定・踏査に取り組みました。当初の発刊予定からは多少時間を要しましたが、19年、支部創立70周年記念誌「甲斐白山」として発刊することになり、遠藤さんも大変喜んでおられました。

入・退院を繰り返した遠藤さんでしたが、看護師さんに「退院したら何をしたいですか？」と聞かれ、「良い奥さんにも恵まれ、やりたいことは全てやったので、特にない」と答えられたそうです。昨年の鶴城山岳会の会報に遠藤さんの記録があり、その中で「結果としてこれが我が人生最後の登山ということになりそうです。楽しく締めくくられた65年間の山通いでした。大軒と我儘にお付き合い下さった全ての方々に心から感謝します。(中略)無理せず、怪我せず、妥協はその都度適当に数十年過ごしてきました。良い人生だったと、再度皆様に感謝いたします。2021年11月30日 遠藤靖彦 本日はナント結婚50周年、金婚式です。女房どの『有難う』と締めくくられていました。最後まで家族思いの遠藤さんでした。

(山梨県山岳連盟会長 山梨支部 会員)

CLUB LODGE

静岡支部が管理する文珠山荘のこと

静岡支部 諏訪部 豊



ログハウスを建設中の荻野恭一会員

静岡市葵区牛妻の集落の上、中平と呼ばれる場所に整備された茶畑が広がる。その茶畑の車道終点に文珠山荘（以下・山荘）がある。山荘は一部2階造り、総床面積29坪の本格的なログハウスだ。この山荘は、ともに故人となつてしまつた荻野恭一永年会員（1962年入会、会員番号5466）と子息の士郎さんが、8年9ヶ月の歳月を掛けて手作りしたものだ。

私が初めて山荘を目にしたのは2012年2月、静岡支部主催ハイクング・セミナーのとき。この日、穂積神社から登つた一行は文殊岳登頂後、この山荘にトイレを借りるために立ち寄つた。荻野恭一会員は当時、この山荘で独り暮らししていた。私は、童話の絵本から抜け出したようなこのログハウスを眺め「いいなあ。今度、荻野さんにお願ひして酒や食材持参で、皆で泊まりに来ましようよ」と同行の会員に冗談交じりで話した。

故荻野恭一会員は1914（大正3）年3月生まれ。旧制商業学校



森の緑に包まれてたたずむ文珠山荘の外観

卒業後、父親が運営する特定郵便局・賤機郵便局に就職した。そして定年後、自身が所有するヒノキ林にログハウスを建てるという長年の夢を実現することにした。

89年6月、数年の準備期間を経ていよいよ山荘建設を開始した。まず建設現場にあるヒノキを伐採して皮を剥き、洗って乾燥した。そして、設計した寸法の長さに切断した。その丸太を基礎と同寸法で作つた型枠に乗せて、1段ずつ水平を出す作業を根気良く続けた。「何百年も持つ家を作るのだ」が口癖だった。子息の士郎さんは休日ごとに作業を手伝つた。

97年8月、山荘完成。このとき荻野さんは83歳だった。畑も作り、愛犬「太郎」とともに独り晴耕雨読の生活を送つた。しかし、2014年（荻野さん100歳時）、独りで生活することが困難になつたため本宅に居を移した。荻野さんは、このころから山荘の維持管理を支部に託すことを決意し、その旨伝えてきた。そして、ご家族も交えての話し合いの結果、土地と建物を本部に寄付し、それを支部が管理していくことが決まつた。

こうして15年6月14日、荻野恭

一さん・士郎さん同席の下、山荘の引き継ぎと大掃除を行なつた。それに安堵したかのように翌7月、士郎さんが病氣他界した（享年77）。また、恭一さんも18年3月、104歳の天寿を全うした。

この山荘を維持し、活用するために支部では年に6回の山荘行事を行なっている。土曜の朝集合して内外の掃除や整備を行ない、夕刻からは山に関する映画を上映する。100inスクリーンと5・1チャンネル・サラウンドだ。映画館で観るのと大差ない。映画の後には山の歌を伴う宴会となる。翌日は朝食後解散となるが、周辺の山に登ることもある。支部行事のほかに外部の方の利用も行なわれている。支部会員が所属する、ほかの仲間たちとの交流が主である。さすがに見知らぬ人だけでは使えないが、山荘利用規則により最低1名の静岡支部会員の全行程同行があれば利用可、としている。

水源地の水涵れ、伸び過ぎた樹木、浄化槽の維持管理、将来の外壁再塗装など課題も多いが、このすばらしい山荘を末永く維持し、活用していきたいと考えている。

（静岡支部事務局長）

日連アルプス

神奈川支部 田島 剛



日連橋から見た日連アルプスの稜線(奥)

「日連アルプス」は、神奈川県北部の藤野地区中央に位置する山稜で、

JR中央本線・藤野駅から見ると南東方向に当たる。相模川を挟み、標高400mほどの低山である。

東から宝山・日連山・峯山・八坂山・日連金剛山と、南部の鉢岡山からなる。宝山には三等三角点が設置され、日連金剛山には火伏の神を祀る金剛山神社が鎮座する。

また、鉢岡山には、甲斐武田軍の烽火台跡が残る。また、日連金剛山と鉢岡山は「藤野十五名山」である。

る。

今回は、紅葉の秋に日連アルプスを縦走した記録を基に、宝山・日連山・鉢岡山往復・峯山・日連金剛山と歩くコースを紹介する。登山適期は3～5月の新緑の季節と、10～12月の紅葉の季節。

【コースガイド】

JR藤野駅を出て国道20号を東に進み、坂を下り日連大橋で相模川を渡る。藤野小学校の手前を左折し、相模川沿いに東へ進み日連橋を渡る。橋の南側に見える山並みが日連アルプスである。さらに舗装路を日連神社まで進み、南に坂を上ると「日連アルプス・ハイキングコース」の地図が描かれた案内板が立つ。ここから沢沿いに歩く。先の台風15号・19号の影響で沢の入り口は多少荒れている。

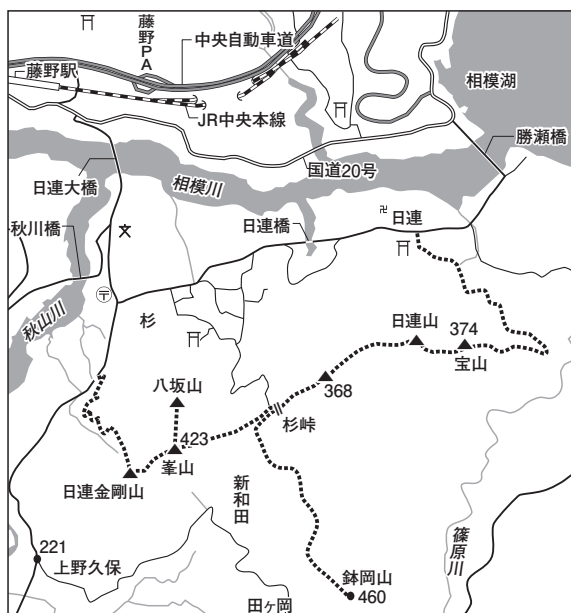
登山道が水平になると東京電力八ッ沢線31号鉄塔が現われ、しばらくすると「この先危険、ロープ使用して下さい」の看板が出る。右側の急な斜面にトラロープが見える。

ここが宝山・日連山への取付となる。ロープ場を過ぎると比較的緩やかな坂道を山頂まで登る。

付近は広葉樹の自然林で、紅葉が美しい。宝山頂上に休憩用のベンチ・テーブルが置かれていたが、三角点は見当たらない。よく見ると、テーブルの直下に設置されていた。まるで三角点を保護しているようだ。

宝山からはなだらかな登りとなり、日連山に至る。日連山の山頂にも宝山と同じくベンチ・テーブルが設置されている。眺望は良くない。日連山から自然林の尾根道を進む。周囲に杉の植林帯はなく、広葉樹が多いため秋なら見事に紅葉している。杉峠に到着すると、金剛山方面への登り道と水平道の2本の道に分かれる。

「鉢岡山」と書かれた道標が立つ水平道を進む。道幅は広くなり林道のように見える。道が大きく西側に



曲がると民家が見えてくる。「新和田・赤沢バス停」の表示がある方向に進まず、真っ直ぐ行く。轍がはっきりと刻まれた林道となり、鉄塔が出てくる。鉄塔を過ぎると登り道となり、鉄製の展望台らしきものが現われる。この先、本日の一番の急坂を登ると、防災無線アンテナが立つ鉢岡山の山頂に到着する。「藤野町十五名山・鉢岡山 標高460m」と書かれた標柱と武田軍の烽火台跡の標柱が立つ。頂上は植林帯に覆われ、展望はあまり良くない。

鉢岡山を後にして杉峠まで戻る。



小さな社が祀られている日連金剛山の山頂

峠からは登りとなり、しばらく行くと「峯山頂へ1分」の標識が現われる。登山道を離れ右側の急な登りを行くと視界が大きく開け、峯山頂に出る。ここに「八坂山分岐点へ1分」と書かれた道標が立つ。八坂山をピストンして、日連金剛山へ向かう。頂上は平らになっていて、金剛山神社の小さな社が立てられている。厳かな雰囲気のある頂上で、社の周りは清掃が行き届いている。明治30(1897)年に杉集落が大きな火災に見舞われ、大損害となった。村の人々は栃木県の古峯神社に安泰を祈願し、この山頂に金剛山神社を建立した、と案内板に書かれている。御祭神

は火之迦具土の神とある。

山頂から登山道は2方向に分かれる。南へ下る道標には、「バス停赤沢を経て県立藤野芸術の家方面」とある。今回は北側の急な階段を降りて、藤野駅方面へ向かう。急坂の登山道が終わると、九十九折の参道となる。大きなイチヨウの木、脇に赤い鳥居が現われると、金剛山神社のバス停に出る。鳥居の前に「金剛山神社参道口」の案内板が立つ。また「登山される方へ、金剛山参道・遊歩道等は台風の影響を受けて荒れています。足元に充分注意して登山してください」と注意書きもある。

バスの時間が合わないときは、藤野駅まで車道を歩く。低山とはいえ、秋なら紅葉を満喫できる山塊である。

【コースタイム】 JR 藤野駅(20分)日連橋(15分)日連アルプス・ハイキングコース入り口(40分)宝山(15分)日連山(20分)杉峠(40分)鉢岡山(20分)杉峠(15分)峯山(5分)八坂山(15分)金剛山(25分)金剛山バス停(35分)JR 藤野駅

【参考資料】 藤野観光協会発行のパンフレット「Hizure Alps HIKING MAP」 「藤野十五名山」

連載■ご当地アルプス登山案内12 相州アルプス

「相州アルプス」は、丹沢山塊でも一番東側に位置する標高500〜700mの山稜だが、この一帯は大山古道に関わる修験の道である。コース中には人気ルートでもある仏果山や経ヶ岳、そして華厳山など山岳宗教に関わる山名・地名が多く、この縦走ではスリリングな登降に古の修験者気分が重なるだろう。

丹沢低山の山麓部では初夏から秋まではヤマビルが発生するので、お勧めはやはり晩秋から初春である。今回は宮ヶ瀬ダムサイトから南下し、厚木市上荻野地区に至るコースを紹介する。

【コースガイド】

小田急小田原線・本厚木駅から神奈川中央交通バス「平原行き」にて「愛川大橋」下車。「あいかわ公園」を目指し整備された公園内をダム天端に向かって登り、「水とエネルギー館」まで行く。

約70m先、左手の登山口(ヒル避けの塩や忌避剤を設置)から取り

中村好至恵

付く。最初からいきなり階段の急登だ。到着した広場のベンチでひと息入れ、小さな登下降を繰り返しながら半原高取山(705m)を目指す。山頂には立派な展望台があり、空気の澄んだ冬には、はるか甲斐駒ヶ岳の白い三角ピーク部が望める。

高取山を後にすると、いよいよコース核心部とも言える修験道、をたどり、相州アルプスの最高ピーク・仏果山(747m)へ。ここにも展望台があり多くの登山客が寛ぐが、休憩後の縦走では両サイドが切れ落ちた、気の抜けない鎖場となる。登り返した小さなピーク、八州ヶ峰には「山岳修験者解説板」がある。

次の草籠石山からは、階段の急な下りが繰り返す。いったん半原越まで下り切ると南山林道と出合い、道向こうの取付から経ヶ岳への急な登りを頑張ると山頂(633m)だ。ピーク手前には、山名由来の「経石」があるので見て行きたい。山頂のテーブルは東丹



沢の名峰・大山を眺めながらの休憩には打ってつけた。この経ヶ岳以降の山域は、地元「西山を守る会」が20年近くにわたる月例山行で登山道や標識の整備、登山マップ配布などに努めている。

経ヶ岳でいったん「関東ふれあいの道」を行き、右手に田代方面への分岐を進む。鹿避けネットが出てきたら、その右側に沿って急下降するが、倒木やザレの要所所にロープがあるので慎重に下りた。途中の大きな木の洞には「モ

ミの木地蔵」があるので山行安全を祈願し、下り切ると次は華厳山(602m)への急登となる。この西山三山(地元から見て西に位置する経ヶ岳、華厳山、荻野高取山の三山)の四季は、丹沢の中でも自然度の高い美しさで、この縦走路後半部の大きな魅力となっている。華厳山からは、早春にアブラヤシの花で淡く黄色に染まる通称「大ダルミ」を下って稜線沿いに進み、最後の山頂、荻野高取山(522m)へは、下山路が左へそれていく分岐点を下らずに、右手の稜線を忠実にたどる。

三角点のある小さな山頂を踏んで、最終展望地「発句石」まで足を運ぼう。松石寺尾根への下降点に発句石説明板があるが、この尾根を下ると3月中旬(下旬に見ごろとなるミツマタの群生地に出られる。説明板の先のトラロープをくぐって進むと「此山やこの鶯に人も居ず」(芦江)という句が刻まれた発句石のある広場に出る。ここからの景観には誰しも息を呑むだろう。採

石により山も消え、厚木市道でもあった登山道が喪失し、魅力的な縦走路と、大山修験道としての歴史・文化が失われてしまったのは残念である。眼前には相州大山が周囲の山々を従えて相模湾に続き、遠く大島や利島まで望める。目を転じれば新宿など大都市圏から筑波山までよく見通せる。「発句石ひろば」には投句箱・用紙も設置してあり、登山者の投句を待っている。

下山は高取山山頂経由で先程の分岐まで戻り、標識に沿って下山道を行く。この高取北尾根は、四季折々の美しさを楽しめる珠玉の尾根路だ。

縦走のフィナーレでは「山の神」にて山行の無事を挨拶後、最後はゴルフ場に出る鹿柵の扉を抜け、急なカーブ道を左に下る。場内の厚木市道をそのまま下り、上荻野地区の住宅地へと出る。用野橋を渡って道なりに浅間神社へ出れば、「上荻野」バス停はすぐだ。山中および下山口からの道案内には、守る会制作の標識と、登山口や山頂に設置してあるマップ・ポストの「黄色いマップ」(無料)を参照することをお勧めする。

「西山を守る会」(問合せTEL 046-24118990) ブログを連日更新中

【コースタイム】愛川大橋バス停

(40分) 水とエネルギー館・登山口

(30分) 展望台(1時間20分) 半原

高取山(50分) 仏果山(1時間35分)

半原越(35分) 経ヶ岳(45分) 華厳山

(30分) 荻野高取山(10分) 発句石

(15分) 高取山(40分) 大沢登山口

(35分) 上荻野バス停

【地図】国土地理院2万5000分の1地形図「上溝」「厚木」「青野原」

吉備人出版「新版 東丹沢登山詳細図」

【図書委員会委員 執筆協力】東京多摩支部・荒井正人

京多摩支部・荒井正人



「発句石ひろば」からの眺め。右奥は相州大山

N — 東北 — — 南北 — S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

献花が行なわれるようになった第17回ウエストン祭

牛丸工

上高地のウエストン祭は昭和22年6月に第1回が開催され、以降綿々と引き継がれてきているが、当初から今の形式で行なってきたのではなく、いくつかの変遷を経て今日に至っている。

昭和39年6月7日の第17回が一つの転換期であろう。この年、元会長・横有恒と日高信六郎、尾崎喜八、村井米子らが参加している。恒例となっている徳本峠の記念山

「会員優待サービス」変更のお知らせ

＊【近畿】鈴鹿・国民宿舎湯の山ロッジ／宿泊料金の割引を廃止し、新たにモーニング・コーヒーをサービス。



黒沢の出合で休憩する横元会長一行

行の前夜、横有恒と日高信六郎は島々宿（正式地名は島々、読み方は「しましま」）の我が家である牛丸亮次（筆者の祖父）の家に泊まっている。

祖父は上高地にある中部日本新聞上高地支局（現在の中日新聞上高地支局）の管理人をしていた。いつから新聞社の支局が上高地にあったか調査不足ではあるが、国民

新聞が最初で、昭和8年5月、国民新聞社は新愛知新聞社に譲渡され、上高地支局の看板が代わり、さらに昭和17年9月、新愛知新聞と名古屋新聞が合併して、中部日本新聞となっていた。

中日新聞社と改称したのは昭和40年1月のことである。祖父は当時、上高地支局の脇にあった「常さん小屋」の管理もしていた関係もあり、生前の常さん（内野常次郎の愛称）と親しかった横有恒が我が家に宿泊したのである。

翌日、島々宿を出発した横有恒一行は徳本峠を越え、黒沢の出合で休憩して写真を撮っている。横有恒を前列中央にして、左は村井米子か、日高信六郎は2列目右端にいる。後列右端は筆者の父である。黒沢の出合という場所は徳本峠から明神に降りてくる途中で、白沢というのが六百山の方角の花崗岩の白い岩が多い地質で、黒沢は大滝山方面の安山岩が多い黒い岩で、その双方の沢が合流する付近の地名である。

その日上高地に下りた一行はどこで宿泊したか定かでないが、翌6月7日は第17回ウエストン祭がウエストン胸像の前で開催された。

この日、安曇村の安曇小学校の女児3人が初めて献花を行ない、以降、毎回献花がされるようになった。3人のうち一人は私の姉で、当時小学校4年であった。最初は安曇小学校の女児だけであったが、いつのころから同じ安曇村内にある大野川小学校の児童と交代で参加するようになった。

午後は会場を小梨平キャンプ場に移し、横有恒は「ウエストン師について」、日高信六郎は「追想」という題目で、村井米子と尾崎喜八も講演を行なった。



図書紹介

出利葉義次著

赤石岳謎の遭難

—リニア中央新幹線建設計画の隠された真実—



2022年1月
風詠社
四六判 294頁
1500+税

本書は、南アルプスの山懐にある小さなダム湖に60代の男性の遺体が浮かんでいるのを管理会社の若手監視員が見付けたという舞台設定で展開する、フィクションのミステリー小説である。しかしながら、読んでいるとそれがフィクションであることを忘れさせられるような内容であり、山を志す人にはぜひ読んでいただきたい一冊である。

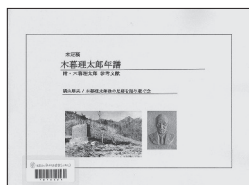
ことは避けるが、本書に登場する「井川」、「樫島」、「聖岳」、「赤石岳」などの地名や山名は、南アルプスに実在するものであるし、さらには、この山域で山小屋などを運営する「株式会社東海フォレスト」という会社名や「二軒小屋」、「白樺荘」といった施設名が登場する点でも一瞬、ノンフィクションの作品なのではないかという錯覚に陥ってしまう、リアリティに富んだ作品である。

著者の出利葉義次氏は、高校から登山を始め、大学山岳部で本格的な登山を開始し、以後、国内外で数多くの山々に登っており、本書の舞台となった地に近い静岡市清水区在住だということだから、これだけリアリティに富んだ作品を作り上げることができたのだろう。小説の構成としては、男性の遺体の第一発見者であるダムの管理会社の監視員、リニア中央新幹線の建設主体であるJR東海（小説の中では、「JR W（ジェイアールウェイ）東海」という架空の会社名を使用）の依頼により、地質調査を請け負う地質調査会社である東亜地質、東亜地質の下請けで実際の調査を行なうも、正確な結果報告を行なうと行政から建設許可が下りなくなるため、東亜地質の依頼で泣く泣く調査結果を改竄せざるを得なかった名古屋地質、リニア中央新幹線の問題を取材すべくこの山域に入り込む地方紙の記者など、様々な立場の人物が登場して、ストーリーが展開している。

「山」を知り尽くした著者が、実際にあった遭難事件2件をモデルにしつつ、この舞台となった地域で社会問題になっている「リニア中央新幹線建設計画」の話題を盛り込んで創作された、完成度の高い山岳ミステリー小説と言えるよう。筆者の関心事は、山岳遭難の問題に留まらず、リニア中央新幹線のトンネル建設に伴う、湧水の流出問題や植生保全など、南アルプスにまつわる自然科学、社会科学全般に及んでいるため、一部、地質学の専門知識が盛り込まれていて、難解に感じる方もいらっしゃるかもしれないが、南アルプスという山域を知る一助になるだろう。

木暮理太郎年譜

横山厚夫／木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会編



2022年3月
木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会
A4判・26頁

本会会員横山厚夫氏と「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」により『木暮理太郎年譜』が編纂された。木暮理太郎の年譜としては、平凡社ライブラリー版『山の思い出』下巻末に浅野孝一・横山厚夫編「木暮理太郎年譜」がある。今回のものはそれをベースとして、その後に判明した事柄を年譜に補い、さらに後半に「木暮理太郎参考文献」が掲載されている。

年譜には、生活事項・山行・執筆活動が盛り込まれていて充実したものになっている。木暮理太郎が自ら執筆した文章は年譜に記載されている。この冊子のもう一つ

の特色は「木暮理太郎参考文献」にあるといえる。木暮理太郎には、追悼文や思い出の記など木暮を偲ぶ文章が、『山岳』や会報を始めとして多方面に及んでいる。本会の会報に載った記事だけでも実に多い。それらを丹念に拾い上げてある。

見出しに「木暮理太郎……」とある文章を探し出すのであれば容易だが、文中の一部で木暮について触れているだけの文章を探し出すのは容易ではない。著書の批評、全集の解説はもとより、全集に添付されている月報にまで目を配っている。そうした文献をも探し出した編者の努力・根気・執念には驚きを禁じ得ない。

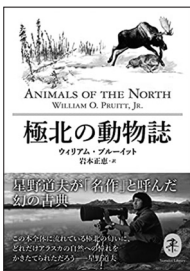
一例をあげれば、武田久吉著『明治の山旅』の甲斐駒の章の冒頭には、自身が登ったのに先立って甲斐駒に登った木暮理太郎の山登りが紹介されている。これは木暮研究に当たって見落としてはならない一文であり、『明治の山旅』「甲斐駒」の冒頭に木暮についての高い評価が綴られている」と記述している。こうした情報は永年にわたる研究により蓄積された知識の裏付けによるものであって、燦然銀のごとき職人業の感がある。近

年はやりの、インターネットを検索して得た情報を羅列したような程度のもとは質を異にする。

日本山岳会史において、取り組むべき課題はまだ多い。その一つは、草創期以来会にあって活躍した会員のしつかりした年譜を作っておくことである。小島烏水ですら、しつかりとした年譜は出ていないのが実情である。今回の『木暮理太郎年譜』は、そのよき手本になるだろう。また、この年譜をベースとして研究がさらに進み、木暮理太郎の評伝が世に出てくることを期待したい。

■木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会(事務局)〒373-0032群馬県太田市新野町882-1 浅海崇夫方 (南川金二)

ウィリアム・ブルーイット著 極北の動物誌



2022年1月
山と溪谷社
A6判 256頁
900円+税

写真家・星野道夫が愛したアラスカ動物学の古典『Animals of the

North」(原題)の復刊である。原書は1960年にアメリカで出版され、日本語訳は2002年に新潮社から出版されたのち絶版となっていたが、このたびヤマケイ文庫として待望の復刊となった。

著者は、1922年生まれのアメリカの動物学者、ウィリアム・ブルーイット。1950年代末のアラスカにおける国家的な核実験場開発計画である「プロジェクト・チャリオット」を環境調査によって阻止し、故国を追われた。研究の場をカナダに移して優れた業績を残し、北米北方生態学の父と呼ばれている。

日本では、星野道夫が著作を通じてその名を紹介したことで知られる。星野は「プロジェクト・チャリオット」の詳細を描いた『ノーザンライツ』の中で、本書を「アラスカの自然を詩のように書きあげた名作」と紹介し、宝物のように大事にしていたという。また、星野の著作「旅をする木」は、1本のトウヒの誕生から悠久の時間を経て自然に還るまでを描いた、本書第1章の「旅をする木」のオマージュ作品である。

全体は15章から構成されており、

北極圏の生態系の基盤であるトウヒからアカリス、ハタネズミ、オオカミ、カリブーやムース、ディンジェ族へと、生きものごとに章立てられている。各章は生態系のように連鎖しながら、それぞれの四季と生命の巡りを描く。

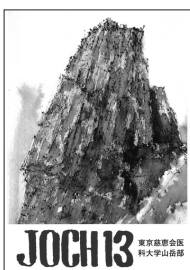
本書の最大の魅力は、「わたし自身ハタネズミのトンネルに入り、アカリスとトウヒが分かちがたく共生しているようすを探り、オオヤマネコと一緒にノウサギのとおり道をそつとたどつてみようと思う」という著者の言葉どおり、まるで自分がその動物になったかのように、極北に生きる動物たちの世界を体感できることだ。それは長年にわたるフィールドワークと、動物や雪への深い愛情に裏付けられたものである。北極圏の生態系では、動物たちが森や雪、太陽といった自然環境の中で密接に関わり合い、危ういバランスを保ちながら生命を繋いでいることを知ることができ、エコロジを学ぶ上での最適なお書となっている。ウィリアム・ベリーによる動物たちのイラストも本書の魅力を引き立てている。

翻訳者である岩本正恵さんは、

あとがきの中で「長い歳月をかけて日本にたどりついたこの本は、〈旅をする木〉なのかもしれない」と書いてある。〈旅をする木〉を手にする喜びを噛みしめつつ、現代における人と自然の関わりのあるようにについて思いを巡らせてみたい。

(井上優美)

東京慈恵医科大学山岳部編 JOCH13号 慈恵医大 山岳部報



2022年4月
東京慈恵医科大学
山岳部
B5判 176頁

『JOCH(ヨッホ)』12号(山岳部創立50周年記念号)から40年ぶりに発行された。今年で創立92年になる。

東京慈恵医科大学山岳部のJAC会員番号は1602番(昭和10年)である。我が岳友、浜口欣一氏の努力で出版に至ったものと思われる。思い出、特集になっている。昔からの仲間が歩いた山行記録と実績のエピソードを巧くまとめ上

図書受入報告(2022年4月～5月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
高橋順之	伊吹山風土記(淡海文庫 No.69)	203p/19cm	サンライズ出版	2022	著者寄贈
佐々木亨	詳しい地図で迷わず歩く! 奥武蔵・秩父 500km [増補改訂版]	208p/21cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
猪野正哉	焚き火と道具	176p/21cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
杉本智彦	スーパー地形公式ガイドブック: 地形を感じる地図アプリ	208p/21cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
深田久弥(編)	峠(ヤマケイ文庫)	367p/15cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
今田重太郎	穂高に生きる: 50年の回想記(ヤマケイ文庫)	256p/15cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
小山義治	穂高を愛して20年(ヤマケイ文庫)	319p/15cm	山と溪谷社	2022	出版社寄贈
大竹口誠治(編)	山と人(第22号, 2022)	410p/26cm	神戸大学山岳会・山岳部	2022	発行者寄贈
三鍋久雄	立山御案内	267p/30cm	桂書房	2022	著者寄贈
成川隆顕	語りつなぐ「早稲田の山」: 自分史に代えて	178p/21cm	双陽社	2022	著者寄贈
浜口欣一・片山隆市(編)	JOCH(No.13): 東京慈恵医科大学山岳部創部90周年	176p/26cm	東京慈恵医科大学・山岳部	2022	発行者寄贈
羽根田治	山はおそろしい: 事故から学ぶ山岳遭難(幻冬舎新書)	227p/18cm	幻冬舎	2022	著者寄贈
中安正議(編)	御坂層(第74号): 御坂山岳会 創立72周年記念	496p/26cm	御坂山岳会	2022	発行者寄贈
溝手康史	ボランティア活動の責任	221p/19cm	共栄書房	2022	著者寄贈
Purandare, Nandini (ed.)	The Himalayan Journal (Vol.75, 2020)	392p/22cm	The Himalayan Club	2020	発行者寄贈

げている。過去を振り返ると、このような部報にならざるを得ないだろう。

目次は、(1)慈恵医大山岳部通史
(2)槍ヶ岳診療所の歴史 (3)登山医学
(4)海外の山 (5)寄稿、とすつきりしている。

山岳部通史は、慈恵のエポックメイキングな記録として登山史に残る、昭和10年から始まる前穂高岳奥又・中又・下又白谷合宿の記録。昭和26年春から昭和31年春まで続けられた不帰第3峰東尾根登攀の記録。当時山岳部長だった高木正孝氏から「相当難しい登攀ができ、静かで人のあまり入らぬ、比較的便利な山として、白馬岳松川南股の山々が薦められた」とある。戦後初の猿倉の春山合宿から眺めた不帰連峰に魅せられ、その第3峰東尾根の登攀に的が絞られたのである。昭和37年4月、越後・鬼面山東面の開拓などもある。そして、昭和55年、慈恵医大創立10周年記念学術登山隊派遣となり、ネパール・ヒマラヤの未踏峰、ガネツシュ・ヒマールV峰(6950m)の初登頂に成功した。この記録は、日本の医科大学では初のヒマラヤ7000m(50m足りない

が)峰初登頂の記録である。

槍ヶ岳診療所の歴史は、視点の角度が変わるので、面白く読める。

昭和26年7月の開設は、槍ヶ岳肩の小屋・穂苅三寿雄氏の全面的な協力でなされ、今年82年目となる。平成19年9月、槍ヶ岳山荘社長・穂苅康治氏の努力と環境庁の協力により、独立した診療所が新築された。慈恵医大山岳部にあって長年槍ヶ岳診療所に関わり続けた、岐阜県神岡町出身の整形外科医、私の畏友であった故大森薫雄(客員教授)氏が思い出される。

登山医学分野の4論文は、「凍傷の治療」については日本の第一人者であった長尾悌夫氏(聖マリアンナ医大名誉教授)。随分と古い話だが、1983年3月、シャモニで開催された第1回国際登山医学シンポジウムで、長尾先生は日本の200例以上の凍傷治療症例を持参して発表された。凍傷治療に関するヨーロッパ各国の関心は高く、議論となり、フランス・イタリアの医師たちとドイツ・日本が対立したが、要は患者をいかに早く治療して社会復帰させるかに関する考え方の違いと、凍傷の切断部をいかに少なくするかに関

する考え方の相違の様相を呈した。あれ以来、どの程度治療法が進んだのか。

ほかに、「過呼吸症候群と山登り」浜口欣一、「下山後の筋肉痛とアミノ酸の効果」浜口欣一、「夏山と紫外線」斎藤三郎ほかがあり、海外の山ガネツシュ・ヒマールの学術報告「ポーターの頸椎可動域について」は登山医学の項に配置換えの方が良いのではないか。

海外の山、ガネツシュ・ヒマール、エルブルス(5642m)、ニュージーランドの南アルプス(世界で一番美しい散歩道歩く)、パプアニューギニアのウィルヘルム山(4508m)、拓大ヒンドウ・クシユのコーイ・パルシユイ(6010m)、立大カンバチェン(7902m)、若き日のヒマラヤ登山と胃癌手術、バ

ルトロ氷河紀行(写真が綺麗、ライオンホルト・メスナーとの出会い)、チヨモランマ・サガルマータ交差縦走(医療班として参加した経験)など。

報告書の白眉は、最後の寄稿編にある。昔の山岳部員が時間というフィルター越しに強烈なエピソードの山行を振り返って、活字にしようとするとき、記録が手元になければ年代や月日すらぼやけてしまい、同行者すら判然としなくなる。人の記憶とはその程度のものである。だが、自分の行動と結び付いたエピソードは鮮明に覚えている。23人の寄稿はそれぞれ読ませる、魅力に溢れたエピソードが凝縮されていて、時間の経つのを忘れて、一気に読ませる力がある。

ここに現役の寄稿がないのは寂しい気がする。(山本良三)

会務報告

令和4年度第2回(5月度)理事会

議事録

日時 令和4年5月11日(水) 19時

00分

場所 集会室およびオンライン

(Zoom)

寄附金および助成金などの受入報告(6月1日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、そのほか
株ENTORRES	500	東海支部若手育成資金寄附
杉山 雄彦 会員	100	東海支部亀の会活動資金寄附
近藤 裕 会員	100	東京多摩支部活動資金寄附
杉山 雄彦 会員	100	東海支部ボランティア委員会活動資金寄附
グローリー エンジニアリング(株)	50	高尾の森づくりの会活動 指定寄附
三井住友銀行	200	高尾の森づくりの会活動 指定寄附
高尾登山鉄道(株)	150	高尾の森づくりの会活動 指定寄附
アサヒビール(株)	100	高尾の森づくりの会活動 指定寄附
伊藤ハム(株)	50	高尾の森づくりの会活動 指定寄附
コニカミノルタ(株)	200	高尾の森づくりの会活動 指定寄附
電源開発(株)	100	高尾の森づくりの会活動 指定寄附
富士電機(株)	50	高尾の森づくりの会活動 指定寄附
メタウォーター(株)	50	高尾の森づくりの会活動 指定寄附
ささえあ ホールディング(株)	50	高尾の森づくりの会活動 指定寄附

【出席者】古野会長、橋本副会長、
柏、南久松、萩原各常務理
事、松田・清水・飯田・久
保田・平川・川瀬・長島各
理事、黒川・佐野各監事
【欠席者】坂井・山本副会長、松原
理事
【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・令和3年度事業報告について
(柏) (賛成12、反対0)
2・令和3年度決算報告について
(南久松) (賛成12、反対0)
3・信濃支部支部長の交代につ
いて(柏) (賛成12、反対0)

4・秋田支部支部長の交代につ
いて(柏) (賛成12、反対0)
5・熊本支部支部長の交代につ
いて(柏) (賛成12、反対0)
6・120周年記念事業募金開始
について(飯田) (賛成12、反対0)

【報告事項】

1・正会員15名、準会員11名の入
会を承認した旨、報告があった。
(古野)
2・信濃支部事務局長の交代につ
いて報告があった。(柏)
3・Google WorkspaceのDM委
員会での試行導入について説明が
あった。(柏)

ル
ーム
日
誌
5月

4・全国支部懇談会(神奈川支部)
の中止について報告があった。(柏)
5・公益法人運営委員会委員長の
交代について報告があった。(南
久松)
6・「山」5月号の発行に関する報
告があった。(節田)

26日 記念事業委員会 山遊会
25日 家族登山普及委員会 麗山
会
23日 ラブ
資料映像委員会 フォトク
21日 アルピニズムクラブ
委員会 山岳古道PT
20日 会報編集委員会 自然保護
19日 支部事業委員会 九五会
18日 三水会 山想倶楽部
17日 バックカントリークラブ
16日 アルピニズムクラブ
13日 図書委員会
12日 YOUTH CLUB 山
岳地理クラブ
11日 理事会 山行委員会 休山
会
10日 山岳古道PT スケッチク
ラブ フォトクラブ
9日 財務委員会
10日 山岳古道PT スケッチク
ラブ フォトクラブ

27日 記念事業委員会
30日 青年部
31日 平日クラブ
5月来室者 174名

会員異動
物故

小滝清次郎(2561) 22・5・11
吉宗俊一(4090) 18・7・不明
豊中貞子(4173) 21・12・18
岡田博司(4920) 21・10・19
川勝弘一(5043) 22・4・5
加藤朝章(6236) 22・2・13
白石丑太郎(7648) 22・4・2
近藤有慶(7771) 21・12・13
杉本宣明(8711) 22・5・2
岡本忠良(8867) 21・9・10
山本武志(9350) 22・5・12
芳賀甚市(9705) 22・1・13
能田忠明(9708) 21・12・27
上島忠義(10306) 22・2・10
青木義明(11118) 22・4・23
退会
稲永 篤(8149) 福岡
金田好司(9424)
中里政信(10048) 宮城
岡村美邦(10065) 埼玉
吉田宗弘(10105)
野村芳雄(10589) 東九州
角 明男(10617) 山陰

高岸 徹	(10804)	関西
轡田隆史	(10891)	埼玉
仕名野完治	(11566)	京都・滋賀
成瀬ヒサ	(12317)	神奈川
小川正育	(13385)	静岡
三野裕輝	(13996)	北海道
池田暁彦	(14045)	北九州
松前 俊	(14114)	
森 茂樹	(14285)	広島
安井賢二	(14532)	福井
正橋立子	(14676)	富山

中村真理子	(15607)	
椋本太造	(15621)	広島
平田 彩	(15622)	
森川智行	(15713)	
結城貴志	(16055)	広島
落合一雄	(16078)	群馬
坂元和博	(16095)	
上田大作	(16231)	北海道
南 聡	(16446)	東海
斎藤桃子	(A0374)	越後

I N F O R M

インフォメーション

A O I N

◆令和4年度第11回「登山教室指導者養成講習会」のお知らせ

日本山岳会支部事業委員会

昨年度コロナ禍のため延期した登山教室指導者養成講習会を開催します。コロナ禍が完全に収束したわけではありませんが、新型コロナウイルス感染症もワクチン接種そのほかの対策が進み、制限されている登山活動も必ず再開される日に備え、登山中のトラブルに

対応する「チームと自己を守るスキル」をテーマに予定しています。

日時 令和4年9月17日(土)、18日

(日)

場所 安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

参加資格 日本山岳会会員で、支部山行・登山教室のリーダーを目指す者

*新型コロナウイルス感染症の状況により、延期・変更されること

もあります。詳細は次号でお知らせします。

◆祖母岳―祖父岳―南真砂岳縦走

山行委員会

雲上の北アルプスを折立から太郎平小屋、祖母岳を経由して雲ノ平散策、さらに祖父岳―南真砂岳を経て高瀬ダムまでの縦走です。

なお、湯俣山荘前の徒歩がでない場合は烏帽子小屋経由で下山

日程 8月5日(金)～7日(日)

集合 5日、折立ヒュッテバス停

6時40分 *東京都庁大型バス駐車場23時00分発折立ヒュッテ行き夜行バス(毎日アルペン号)が便利。

行程

5日・折立ヒュッテ―太郎平小屋―薬師沢小屋(泊)

《約7時間15分》 6日・薬師沢小屋―アラスカ庭園―祖母岳―雲ノ平山荘―日本庭園―祖父岳―岩苔乗越―水晶小屋(泊)《約8時間》 7日・水晶小屋―東沢乗越―南真砂岳―湯俣岳―晴嵐荘―名無小屋―高瀬ダム《約9時間50分》七倉山荘(入浴) 信濃大町駅(解散) [健脚向き]

費用 3万3000円(山小屋代2泊・タクシー代・保険料ほか)

定員 先着8名まで

申込み 7月15日(金)までに、三枝光吉へ☎080-6627-5687

5687 ☒sanko@jac.or.jp

*傷害保険加入のため性別、生年月日を、また、参加者名簿作成のため会員番号、住所、緊急連絡先(続柄)、電話番号、携帯電話番号などお知らせください。

◆白馬岳から日本海へ(梅海新道)

山行委員会

一度は歩いてみたい、白馬岳から日本海に続く梅海新道。全長40kmの縦走に挑戦してみませんか!

日程 8月26日(金)～29日(月)

集合 26日白馬駅バス停6時40分

(*バスタ新宿23時05分発安曇野・大町・白馬行き夜行バス(さわやか信州号)が便利)

行程

白馬駅―猿倉―葱平―白馬山荘(泊)―白馬岳―雪倉岳

―朝日岳―朝日小屋(泊)―朝日岳―黒岩山―梅海山荘(泊)―白鳥山―梅海新道登山口―親不知駅(解散)

歩程 26日…約6時間 27日…約7時間40分 28日…約8時間10分 29日…約10時間(健脚向き)

費用 3万8000円(山小屋代2泊・無人小屋1泊協力金・弁当代・タクシード・保険料ほか)

定員 先着8名まで

申込み 7月20日(水)までに、数見直へTEL090072044668

sanako@jac.or.jp

*傷害保険加入のため性別、生年月日を、また、参加者名簿作成のため会員番号、住所、緊急連絡先(統柄)、電話番号、携帯電話番号などもお知らせください。

◆日本山岳協会展―創立86周年記念展覧会―

日時 7月3日(日)～9日(土) 11時～17時、初日は正午から、最終日は16時まで

会場 東京交通会館B1 ゴールドサロン

(〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-10-1)

TEL03-3215-7933

問合せ 杉山修

TEL090054404552

◆上高地インタープリター活動への参加のお願い

山の自然学研究会

期間 8月1～5日(5日間)

内容 《ミニトーク》ホテルに向き、宿泊客に自然解説を行なう(西糸屋山荘、上高地アルペンホテル、上高地温泉ホテル)。内容は上高地の自然の話や、自分が取り組んできた活動で紹介したいものなど(19時30分～20時30分)。

《ガイドウォーク》河童橋から明神までを自然解説をしながら歩く。9時に河童橋を出発し、11時ごろに明神に到着を予定。
*活動に参加していただける方は左記へご連絡ください。
山の自然学研究会代表・源原重行(みなはら)

TEL090025487056

mmhr1940@btr-t.com.ne.jp

◆松田敏夫展

登山中に描いた絵とそれを基に制作したシルクスクリーン作品を中心に展示。6月出版予定の画集『山に抱かれ染まる刻』(信濃毎日新聞社)の出版記念を兼ねます。

日時 6月30日(木)～7月31日(日) 9時30分～16時30分(火曜休館)

会場 小川村郷土歴史館(ふるさとらんど小川) 長野県上水内郡小川村高府9307

TEL02622692270

◆東山一勇気 きりえ個展

きりえ歴43年、5回目の個展を開催します。

日時 8月22日(月)～28日(日) 11時～18時(最終日15時まで)

場所 ギャラリーくぼた本館4階 〒104-0031 中央区京橋2-7-11

http://www.gallery-kubota.co.jp/

問合せ 東山一勇気

TEL0467445532

higashiyama@now.mfnet.ne.jp

http://www.jp.kirrie.com/koten.html

訂正

*本会報4月号(923号)7ページ、「追悼」欄の故水野勉会員の略歴で「東京都練馬区生まれ」としましたが、練馬区は本籍地で、お生まれは福島県郡山市でした。訂正させていただきます。

〈会報編集委員会〉

◆編集後記◆

●コロナ禍の下、日本の登山界も休眠状態でしたが、久々に嬉しいニュースが入ってきました。今号に掲載された谷・山田コンビによるカンチユンナツ北西壁の初登攀です。同峰は1953年、エベレスト初登頂の折、事前の高所順応訓練でE・ヒラリーらが南面から初登頂していますが、北面への挑戦は遅く、近年、各国隊が挑戦していたクランプの課題でした。

●同じくこの春、首都圏の大学山岳部の若手OBたちが、アラスカのハンター北壁ムーンフラワー・パットレスの登攀に成功。デナリ登山のランディング・ポイント、カヒルトナ氷河南東支谷の目の前にそびえる1200mのミックス壁ですが、この記録も8月号に掲載します。乞うご期待。(節田重節)

日本山岳会報 山 925号

2022年(令和4年)6月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 古野 淳

編集人 節田重節

Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社